



カビが体の中に入ると、「がん」になるの

カビは、「がん」になる原因にはなる

「がん」は、体の細胞（正常細胞）が、「がん細胞」に変わってしまい、そのまま、体のいろいろな部分でふえ続ける病気です。

“がん細胞”は、いちどできると、体の中でどんどんふえ続けるため、最後には、体のはたらきが、だめになってしまうのです。

体の中に、“がん細胞”ができる原因をつくるものを、「発がん物質」といい、その一つに、カビが入っています。ですから、カビが体の中に入ると、必ず「がん」になるとはいえませんが、「がん」になる原因にはなるといえるのです。

「がん」になる、原因をつくるものは

“がん細胞”を発生させるものとしては、多くの化学物質、紫外線、放射線、ウイルスなどが、よく知られています。

また、「発がん物質」としては、たばこ、自動車の排気ガス、しらが染めなどや、そのほか多くの薬品や金属にもふくまれていますし、食品では、焼き魚のこげた部分、ワラビ、ゼンマイなどにも、ふくまれているといわれています。（監修・保志 宏）

